

# 国際日本研究と私

中村 尚史

## ●シルクロードから日本へ

子供の頃、NHK特集「シルクロード」が好きだった。喜多郎の音楽とともに流れる美しい映像と、諸国興亡の夢のあとは、少年を歴史の世界にいざなった。シルクロードへのほのかな憧れを胸に大学生になった私は、はじめ東洋史を専攻するつもりでいた。ところが大学一年生の語学クラスで、厳しい現実を突きつけられた。中国語が聞き取れないのである。いくら四声の練習をしても、どうしても単語が聞き分けられず、中国語のテープを聞いているうちに、音楽を聞いている時のように眠くなってしまふ。漢文はある程度できたので単位を取ることはできたが、ヒアリングは二年間やっても一向に上達しなかった。この点は英語クラスでも同じで、聞き取った文章を書き取るディクテーションが、からきしダメだった。中国語

も英語も、個々の単語が聞き取れず、言葉が旋律としてのみ聞こえる。言語というより、音楽に近い。どうも語学の才能がないらしい。そう悟った私は、外国語を使わずに研究できるであろう（と思われた）、日本史への転向を決意した。

## ●日本史研究室

それから一〇年近く、私は大学院入試の語学試験の勉強を除き、外国語をほとんど使わずに過ごした。明治期の経済史を専攻した私にとつて、研究対象は日本であり、史料も日本語であった。日本の歴史を、日本語の史料を用いて研究することは自然である。もちろん英語の文献を読むことはあったが、それは理論の勉強や、比較史のためであり、英語で思考・記述する必要は感じなかった。私が進学した九州大学の大学院には外国から

の留学生もたくさん来ていたが、みんな日本語が流暢で、私より古文書が読める人もいた。外国人の先輩たちのなかには弁の立つ人も多く、世界にはすごい人たちがいるなあと、素直に感心した。こんなに優秀な人たちが世界中からわざわざ来ているのだから、日本史研究の分野では、日本の学界こそが世界の最高峰であり、最前線であると、漠然と考えていた。日本史研究室の共通言語はあくまで日本語であり、日本人も、外国人も、日本語で読み、思考し、記述するトレーニングを受けた。そのことに当時は何の疑問も持たなかったし、今でも日本研究の研究者を養成するためには有効な方法の一つだと考えている。

## ●国際日本研究との出会い

一九九四年四月、私は東京大学社会科学研究所（以下、東大社研）

の助手になることができた。東大社研は経済史、経営史、政治史の著名な研究者を数多く擁する近代日本史研究のメッカであり、九州の田舎者であった私にとつては、憧れの場所であった。お上りさん状態で、いろいろな研究会やセミナーに顔を出してみた。そのなかには、キャロル・グラックやアーサー・ストックウイン、アン・ウォズオといった著名な海外の日本史研究者のセミナーがあった。いずれも流暢な日本語で、ウィットに富んだユーモアを交えながら、私が考えてもいなかったようなスケールの大きい議論を展開されていた。史料や数字の正確な読解と緻密な論理展開を特徴とする日本の実証的な歴史研究とは、ひと味も、ふた味も違った研究のスタイルに戸惑ったが、これはこれで面白いなど感じた。振り返ってみると、それは、私にとつて国際日本研究との初めての出会いであった。

国際日本研究とは、日本の社会・文化を国際的な視野から研究することを意味し、実際には海外で展開している日本研究 (Japanese Studies, Japanology) をさすことが多い。当時の東大社研は、社会科学分野における国際的な日本研

究の拠点形成をめざして、大きな組織改革を行いつつあった。具体的には、一九九二年に国際現代日本研究部門（外国人客員部門）が新設され、さらに一九九六年度に「国際日本社会部門」を含む日本社会研究情報センターが附置されて、日本研究の国際的なハブ拠点としての陣容が整った。私が助手として東大社研に在籍した一九九四年度、九五年度の二年間は、まさにこのセンターの立ち上げ準備の時期であった。この時期に著名な日本研究者のセミナーが頻繁に開かれていた背景には、東大社研が国際日本研究の拠点たりうることを対外的にアピールする狙いもあったと思われる。もちろん新入りの期限付き助手であった私に、そのあたりの事情は知る由もなかったが。

### ● Social Science Japan Journal への投稿

二年間の楽しい助手生活を終えて、一九九六年四月、私は埼玉大学経済学部にて赴任した。最初の二年間は、授業準備と博士論文の執筆が重なり、多忙を極めた。あまりのストレスで軽い十二指腸潰瘍になつたくらいなので、国際日本研

究どころではなかった。博士論文をもとにした単著を刊行し、ようやく一段落ついたところ、末廣昭先生から、英文レフリー雑誌に投稿してみないかという誘いをうけた。末廣先生が投稿を勧めてくださった英文雑誌とは、一九九八年に創刊された「Social Science Japan Journal」(SSJJ)という、東大

社研が編集し、オックスフォード大学出版局(OUP)から年二回刊行されている雑誌であった。末廣先生によると、完全な覆面外部レフリー制をとり、しかも外部レフリーの内訳は日本人二人、外国人二人以上という手厚さで、様々な角度からの有益なコメントが期待できるという。日本経済史・経営史の学会誌の場合、投稿資格は会費を払っている会員にしかなく、しかも当時はまだ覆面外部レフリー制度を確立している雑誌さえ多くはなかった。その意味で、確かにSSJJは魅力的である。しかし英語で論文を発表しても、いったい誰が読むのだろうか。国内の日本史研究者はまず読まない。東大社研で出会った外国人の日本研究者は目を通してくれるかも知れない。どうしようかと思案していると、末廣先生から日本語

での投稿も受け付けるという追伸が来た。日本語でも良いのであれば、翻訳のための時間と労力がかからないので、気軽に投稿できる。それにレフリーの意見も聞いてみたい。そこで私は、SSJJへの投稿を決意した。

### ● SSJJ編集委員会

二〇〇二年四月、私は東大社研に舞い戻った。そして右も左もわからないうちに、SSJJ編集委員会なる所内委員会に配属された。外国語が苦手で日本史を専攻した私が、なんと英文学術雑誌の編集に携わることになったのである。以来、八年間、「そろそろお役ご免にしてください」という懇請空しく、SSJJ編集委員会から足抜けできずにいる。SSJJの特徴は、社会科学のあらゆる分野から日本関係の学術論文の投稿を受け付けている点にある。それに対応する形で、編集委員会も法学、政治学、経済学、社会学、歴史学、人類学の専門家から構成されている。しかし論文の審査には、編集委員全員が参加するため、当然、専門外の論文も読まなければならない。これまで基本的に、経済学と歴史学の論文しか読んでこ

なかつた私にとって、社会科学の他分野の英語論文を、真剣に、しかも大量に読むというのは、はじめての経験であった。それだけでも苦行なのだが、論文審査の際には、当然、各自の意見を求められる。要するにゼミで、毎月、様々な分野の論文に対する書評形式のレポートを行っているようなものである。これはしんどい。最初の一年間は、月に一度の編集会議が億劫で仕方がなかった。

### ● シェフィールド大学東アジア研究院

SSJJの仕事に少し慣れてくると、「国際日本研究」なる研究領域が気になりはじめた。各分野の専門領域とは別に、海外では地域研究の一つとして、「日本研究」という分野が成立しており、それがSSJJの主たるフィールドであることがわかってきたからである。そこで、取りあえず一度、国際日本研究の世界的な拠点に行ってみようと思いついた。文部省在外研究(海外学術調査)からの資金援助を得て、二〇〇三年一月から〇四年一月にかけて二カ月間、私はイギリスのシェフィールド大学東アジア研究院に滞在し

た。はじめの在外研究となったこの二カ月間は、私にとって決定的な意味をもった。第一にこの滞在中で、英語に対する漠然とした不安感が薄らいだ。もちろん今でも、英語は得意ではない。早口の英語でまくし立てられると、半分くらいしかわからないこともある。でも半分わかれば、そしてキーワードが聞き取れさえすれば、何とか会話や議論が成り立つことをここで学んだ。第二に、国際日本研究という分野の存在意義が理解できた。それは、日本人が知らない日本を外から発見すること、に集約できる。もちろん日本のことを海外に知らせるといふ機能もあるが、これは日本人が直接、英語で発信すれば済む問題である。国際的な視野に立つて日本を研究することで、我々が思いつかないような議論が出てくる可能性があるし、現にそうした研究が登場している。それは日本で、日本史研究に没頭してきた私にとって、一種の衝撃であった。

●近代日本史研究会 (Japan History Group)

シェフィールド大学から帰ってしばらくして、SSJJのマネジ

ングエディターで、日本近代史の研究者であるジェイソン・カーリー氏(現東京大学大学院情報学環)が、英語と日本語のバイリンガルの日本史研究会を、一緒にやらなにかと提案してくれた。イギリスで少し英語に馴染んだ私は、そのスキル・アップの場を求めていることもあり、この提案にすぐに賛成し、二〇〇四年度から東大社研のグループ研究として、近代日本史研究会 (Japan History Group・JHG) を立ち上げた。この研究会は、私の在外研究中(二〇〇七年度)の休止をささみ、組織者にミハエル・ブルチャー氏、五百旗頭薫氏を加えつつ、隔月程度のペースで現在も続いている。SSJJが社会科学分野における学際的な国際日本研究の拠点を目指しているとなれば、このJHGは日本の日本史研究と海外の日本史研究との架橋をめざす研究会という位置づけになる。近年、同じ日本史研究でありながらも、日本と海外、とくにアメリカとは、問題関心や研究方法の面で大きな隔たりが生じている。こうした状況を打開するためには、相互の対話が必要であるが、日本人は日本語しか使わず、外国人はそれぞれの母

語しか使わないとなると、対話は成り立ちようもない。そこで、それぞれが得意な言語を用いることで、対話を容易にしたいという狙いから、報告は原則、外国人は英語、日本人は日本語で行い、討論者として報告者が外国人の場合は日本人を、日本人の場合は外国人を用意し、議論は日本語と英語、双方の言語で行うという、珍しいスタイルを採用している。報告者が外国人であることが多いため、結果的に英語での報告が多いが、議論はあくまでバイリンガルというルールを維持している。それは、何が何でも英語を使うべしという、英語帝国主義と距離をとりつつ、対話の道具として英語を使いこなすために我々が考え出した、一つの仕掛けである。

●道具としての英語

私の専門は日本経済史・経営史である。これまで、日本の歴史について、日本語の史料を用い、日本語で思考し、日本語で記述してきた。最近では海外の史料(日本語、英語、ドイツ語)も用いはじめているが、日本語をベースとした研究スタイルは変わりそうにな

いし、変えるつもりもない。日本の歴史を日本語で分析し、記述することは、至って自然だと思うからである。しかし、日本史研究者は英語を用いる必要がないとは思わない。むしろ日本史研究者こそ、「道具としての英語」を使いこなすべきだと考えている。

国際日本研究のなかには、日本で日本のことを研究する私たちが思いも付かないような発想があふれている。その一方で、海外で展開する日本研究が、人的、物的資源の制約もあつて、非常に偏ったものになっていることも事実である。こうした偏った日本研究のイメージを是正するためには、海外の研究者との対話が不可欠であり、また我々が直接、海外に発信していくことが必要である。国際日本研究のトップ・ジャーナルであると同時に、優れた日本語の日本研究を英語に翻訳し、世界に発信する機能をもつSSJJや、英語と日本語のバイリンガルの研究会であるJHGは、その意味で大きな役割を担っていると、私は思う。

(なかむら なおふみ/東京大学社会科学研究所)